

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

# 「英語の授業は英語で」の考え方 : Oral Introduction を核とした授業構成の提案

著者	小菅 和也
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	3
ページ	57-67
発行年	2017-09-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00000637/">http://id.nii.ac.jp/1419/00000637/</a>

# 「英語の授業は英語で」の考え方

## —Oral Introduction を核とした授業構成の提案—

### How to Conduct English Classes in English Using the Technique Called “Oral Introduction”

小 菅 和 也<sup>\*</sup>  
KOSUGE Kazuya

## 1. 本稿の目的

現行版の高等学校学習指導要領外国語編に「授業は英語で行うことを基本とする」と記載されている。また、平成33年度から施行される、中学校版の新学習指導要領にも同様の記述が加わった。「英語で進める英語の授業」を趣旨とした書籍も多数出版され、教員の研究会、民間団体による現職教員向けの講習会なども多数開催されている。では、中高の現場は大きく変化してきたのだろうか。限られた範囲ではあるが、耳に入ってくる情報はあまり芳しくない。もちろん、英語で授業が進められていればよい、という単純な問題でもない。

本稿の目的は、中学校・高等学校の英語授業の基本的な考え方を提案するものである。もちろん、授業にたったひとつの正解というものはない。しかし、英語という「ことば」の授業を、効果的で有意義なものにするためには、学習指導要領の文言に関わらず、守るべき大きな原則があるはずである。これまで、大学で英語の教職科目を担当し、民間の英語教育研究団体に所属して英語の授業研究会に多数参加し、現職教員の研修会講師を務めてきた経験も踏まえて、ひとつの方向性を示したい。

## 2. 英語授業の基本的な考え方

### 2.1 前提

英語の授業に限らないが、授業を組み立てる上で、次の2点をまず大前提としてとらえることが重要である。立場上、生にせよ、DVDに収められた映像にせよ、中学や高校の英語授業を多数見てきた。1時間の中でさまざまな活動が行われる。熱心な教師ほど、研究会や書物からさまざまな活動のアイディアを学び、それを授業に取り入れる。素人目から見ると、生徒が活発に活動しているようで、望ましい授業に見える。しかしながら、カタチのみにとらわれて、以下の2点がきちんと考えられていない授業が意外に多い。

---

<sup>\*</sup> 武蔵野大学教育学部

### (1) 各活動の意義づけ

授業中のある活動が、何のために、何を目的として行うかを、教師がしっかり認識しているかが重要である。単に、生徒が主体的に活動している（ように見える）からとか、教室が盛り上がるからとか、楽しいからとか、という程度の認識しかないと思われる場面を目にすることが少なくない。どのような学習効果を期待して行うのかを、教師がまずしっかり認識する必要がある。もちろん、それが実際に期待した効果をもたらすかどうかは、次の課題である。

### (2) 手順の整理

上記(1)に述べた各活動の意義づけがしっかりできれば、さまざまな活動をどのような順序で組み立てていくか、合理的な手順を考えることができる。これも現実の授業では、明らかな手順前後、無理な展開が往々にして見られる。たとえば、高校の授業でいまだに多く見られる例として、新教材の本文を（CDなどを利用して）いきなり音読練習をして、次に内容理解（しばしば和訳の作業）といった展開は、inputとoutputの順が逆である。また、本文のCDを1回聞かせただけで、いきなり生徒同士でペア・リーディングをさせたりするのも、途中の段階が抜けていると言わざるを得ない。

## 2.2 英語授業の基本

上記の前提を踏まえ、英語の授業について、基本となる要素について考える。以下の4点を挙げたい。

### (1) 英語の授業は英語で

学習指導要領の文言にかかわらず、英語の実技としての側面を考えれば、これはある意味当然のことである。生徒は体育の時間には実際に体を動かすわけであるし、音楽の授業では、歌ったり楽器を演奏したりするわけである。英語の授業で、生徒が英語を聞き、話し、読み、書くのは当然である。英語についての解説中心の授業（この発想は、高校に限らず、中学でもいまだに根強い、というのが筆者の実感である）では、「コミュニケーション能力」は身に付かない。ただし、「英語の授業は英語で」は決して、日本語の使用を排斥するものではないことを付け加えておく。場面によっては、日本語を母語とする生徒たちに対して、日本語で説明することが有効な場面も当然存在する。

### (2) face to faceの状況を最大限に生かす

日本の外国語教育環境は決してよいとは言えない。特にクラスサイズである。外国語教育で、1クラス30人、40人はあまりにも多く、非現実的である。最近「少人数クラス」の試みも多く行われているが、教師と生徒の「1対多」の関係は本質的に変わらない。では、教室場面の利点は何かと言えば、これは、教師と生徒、あるいは生徒と生徒が実際に顔を合わせている、つまりface to faceの状況である、という点である。これはいかに英語に興味・関心がある生徒でも、自宅学習では得られない状況である。この状況を最大限に生かすことが重要である。つまり、教師と生徒、あるいは生徒と生徒とのやりとり（interaction）によって、互いに英語を「使う」

場面を増やす、ということである。

ただし、これについても一言付け加えたい。最近、英語の授業でもペアワークをよく目にするようになった。ただ、新出単語の英語・日本語訳のリストのハンドアウトを用いた、クイズの出し合いのような、ゲーム的ではあるが、英語を「ことばとして使う」というところからはほど遠い活動にとどまっているケースが、やはり少なくない。授業のひとつのステップとしてメカニカルな練習の必要性は否定しない。ただ、そこで止まってしまえば、face to face の状況を生かしたことにならない。

### (3) 日本人教師の自覚

言うまでもなく「教える」というのは専門的な仕事である。英語は知っていれば教えられる、という単純な問題ではない。一般に、日本人英語教師の英語運用力は、筆者自身も含めて、（もちろん例外はあるが）ネイティブスピーカーには遠く及ばない。しかし、我々は「教師」という専門家である。それを自覚して、英語の授業では、自分自身の英語を積極的に使うようにしたい。

音声指導は常にCDに頼る、ALTとのチームティーチングでは日本人教師が常にアシスタントになってしまう、といった状況は避けたい。もちろん、そのためには、生徒たちに少しでも質の高いインプットを与えられるように、日本人教師は日ごろから研鑽に努めなければならない。特に、音声面はどうしても優先順位が低くなりがちであるが、ことばはまず音声であることを十分自覚したい。今後、小学校でも英語が教科化されることを考えると、教師が児童・生徒に与える英語の音声インプットの重要性は増大する。

### (4) 領域のバランス

ことばには「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能がある。ことばはまず音声ありき、であることを考慮し、また、以下に述べる、The Oral Methodの考え方に即し、英語の授業では、音声面である「聞く」「話す」を第一に考え、これに文字の側面である「読む」「書く」を有機的に関連させる、という方針に基づいて論を進めていく。ただし、これは、「聞く」「話す」が「読む」「書く」よりも大事である、ということではなく、文字言語を扱う際にも、音声（acoustic image）が重要な働きをする、という考え方に基づく。

## 3. Oral Introductionの考え方

前述の2.2 (1) (2) の記述から浮かび上がる英語授業のありようは、教師と生徒が互いに英語を使いながら（interactionをしながら）、授業が積み上げられていく、というものである。一方、中高の英語の授業では、検定教科書という文字教材が伴う。この両者をうまく組み合わせることが可能になるのが、Oral Introduction という手法である。

### 3.1 Oral Introductionとは

オーラル・イントロダクション（Oral Introduction）とは、本来、日本の英語教育改革に尽力したハロルド E. パーマー（Harold E. Palmer）が提唱し、日本で実践したオーラル・メソッ

ド (The Oral Method) に基づく手法である。パーマー自身は、Oral Introduction という用語を用いたわけではないが、そのあたりの経緯は別の機会に論じたい。

Oral Introduction とは、簡単に言うと「主として教材の内容を、既習の語彙や文型を使って口頭で導入すること」(語学教育研究所編 (1988) : 2) である。また、同趣旨であるが、白畑・他 (2013 : 215) は以下のように説明している。

オーラル・イントロダクションは、教師がその日に扱う教材の意味内容を既習の語彙や表現を使って、分かりやすく語って聞かせるものである。全体の意味を直感的に把握する能力を育てることを目的とする。

また、小川・他 (1982 : 418) は、以下のような説明を加えている。

…口頭導入は単に新しい教材をそのまま聞かせることだけではない。口頭導入の技術は新しい教材を意味ある発話として提示するために工夫されるものである。そして動作とか絵とか実物などを使っての動作表示 (demonstration) は、発話をより具体的な場面 (situation) の中で、意味のあるものとするための重要な補助手段である。また、対立 (contrast) の技術は新教材を既習教材と関連させて、それがどのような点で新教材であるかを理解させるための方法である。

一般に、Oral Introduction は、「(1) story-centered なもの (2) structure-centered なもの」(語学教育研究所編 (1988) : 2) に分けられるが、前記の小川・他 (1982 : 418) による解説のうち、前半の demonstration は story-centered な内容、後半の contrast は structure-centered な内容にかかわる記述と考えればよいであろう。

現状では、さまざまな意味合いで、Oral Introduction という用語が用いられている。極端な場合、単に教師がテキストを読み上げる、あるいは該当部分の CD を流すことを、指導案に Oral Introduction と記しているものさえある。本来のあるべき Oral Introduction は、パーマーが初代所長を務めた「英語教授研究所」を前身とする「一般財団法人語学教育研究所」で、研究・実践・普及が進められて今日に至っている。その考え方に基づいて以下の議論を進めていく。

### 3.2 Oral Introduction のポイント

以下に、望ましい Oral Introduction のポイント掲げる。

#### (1) 原則として生徒に予習は求めない。

これにもさまざまな考え方があるが、特に中学校レベルでは、生徒に白紙の状態授業に臨ませるほうが効果的である。もちろん、予習を前提とした Oral Introduction もありうる。その際、予習として何を求めるかが重要となる。

## (2) 教科書は閉じさせる

口頭による導入であるから、この段階で文字教材は不要である。Oral Introductionは “Close your textbooks.” あるいは、“Keep your textbooks closed.” といった教師による指示から始まる。これが非常に重要である。

## (3) 教師と生徒による英語でのやりとりが基本

かつてのOral Introductionは、教師がまず一方的に英語で語り、その後、生徒の理解確認のために、英語でtest questionsを与える、という流れであった。しかし、これでは、生徒が受け身になりがちであり、しかもtest questionsは記憶力のテストになりかねない。そこで、教師が一方的に語るのではなく、できるだけ生徒とやりとりをするような形で進める。具体的なやりとりの方法については、3.3.2で述べる。

## (4) 視覚的補助の活用

英語音声でのやりとりが基本であるが、生徒の理解を促進するために、視覚補助（visual aids）を活用する。黒板に絵や写真を貼ったり、キーワードを書き出したりするなどが考えられる。完成した板書は、後の生徒による発表活動にも活用できる。今後ICTの設備が普及すれば、動画なども使いやすくなるであろう。

# 3.3 Oral Introduction 運営の注意点

Oral Introductionの運営について、実践に必要となる、さらに細かな注意点を挙げる。

## 3.3.1 意味内容提示のバリエーション

Oral Introductionは基本、英語のみで行うわけであるが、生徒にとって未知語をいかに理解させるかについて、パーマーは、①by material association ②by translation ③by definition ④by contextの4つを挙げているが、筆者はひとつ加えて以下の5つを考える。

### (1) By Material Association

「実物と結びつける」ということで、実物を見せる方法である。代わりに絵や写真を示す、あるいは動作で示す（たとえば、歩きながら “I’m walking.” と言う）のもこれに含めて考える。

### (2) By Translation

日本語訳を言うことである。パーマーはこの方法も排除していない。実際、時には効率的な方法である。ただ濫用すると、英語で口頭導入する意義が失われてしまう。

### (3) By Definition

定義とは、やさしい英語で説明することである。たとえば、A hospital is a place where doctors and nurses take care of sick or injured people. ただし、英英辞典の説明はそのままでは現実の生徒たちにはわかりにくいことが多い。多少説明の厳密さは欠いても、生徒にとってわ

かりやすい英語を教師自身が考えるほうが望ましい。

#### (4) By Context

文脈で示す。たとえば、前述の hospital を例にとれば、One morning Tom got up, but he felt sick and he had a fever. So he was absent from school and went to the hospital near his house. のような文脈を示せば、トムが医者あるいは病院に行った、ということが推測できる。

#### (5) By Giving Examples

具体例を挙げる方法である。たとえば、動物の種類に primate というのがある。辞書的な定義文を提示するよりも、For example, a gorilla is a primate. A chimpanzee is a primate. We human beings are primates, too. のように具体例を挙げるほうがイメージがつかみやすい。「霊長類」などという日本語訳を与えるよりわかりやすいのではないか。

また、上記のうちのひとつを使うというわけではなく、複合すればさらに理解を促進しやすい。絵を見せて説明する、定義を示して具体例を挙げる、などである。

### 3.3.2 英語によるやりとりの要領

#### (1) できるだけ質問を投げかける

生徒とのやりとりと言えば、まず QA が思い浮かぶ。教師の一人芝居にしないためにも、極力生徒に質問を投げかけるようにするのがよい。質問はおよそ次の3種類に分けられる。

①生徒の既有知識にはたらきかける：例として、有名人（スポーツ選手でも、映画スターでも）の写真を示して、Who is this man? と問いかける。教科書教材を、生徒にとって身近なもの、実感を伴うものにする効果もある。あるいは、What is your favorite sport? のように、生徒が現実に即して答えればよい質問も同様である。

②内容理解の確認：教師が語った内容の理解を確認するための質問である。教師の語りの途中にこまめに織り込んで、生徒の理解を確認しながら導入を進める。生徒の記憶力のテストにもならずすむ。

③教師の自問自答：生徒からの答えを期待しない場合でも、まず質問を投げかけることによって生徒の注意・関心を引くことができる。例えば、物語の登場人物の絵を示して、いきなり、This is Tom. と説明してしまうより、Who is this boy? とまず問いかけ、一呼吸おいてから、He is Tom. と紹介する。

また、生徒の誤答・無答に対する対応も重要である。できるだけ生徒から答えを引き出せるようにヒントを与える。答えやすくするための手立てとして、一般には、Wh- 疑問文は選択疑問文 (A or B?) に、さらに Yes-no 疑問文に変えていく。また、周りの生徒と相談させるのもよいし、どうしても答えが出なければ、他の生徒に答えさせ、再び当該の生徒に戻って答えを繰り返させるなど、「見捨てられた」ような印象を与えないように臨機応変に対応する。

#### (2) 練習を取り込む

QA は、その場では、教師と特定の生徒1対1の活動である。クラスには多くの生徒がいる。



QAにとどまらず、Oral Introductionに練習も取り込んで、クラス全体を活動に巻き込む。新出語を導入し、生徒たちが理解したら、全体で発音練習をする。単語レベルにとどまらず、句レベルでも、キーセンテンス全体でも、クラス全体を巻き込んで練習する。Oral Introductionは本来インプットの活動であるが、全体でアウトプットの活動（発音練習）も取り入れることによって、理解を強化し、後で行う生徒による発表活動の土台作りともなる。なお、練習は、教師のモデル→全体でのリピート→個人数名の指名→もう1度全体でまとめ、という流れをきっちり作っておくと、練習量も確保でき、生徒も授業の進行についていきやすくなる。

### (3) 教科書教材をいかに料理するか

Oral Introductionは、教科書教材を下地としながらも、教師と生徒とのコミュニケーションの場である。中学レベル、高校レベル、教材の内容によっても扱い方は変わるが、教師が教材をどう料理するかが非常に重要である。題材内容が主（story-centered）であれば、内容を要約して伝えることもあるし、反対に教科書には書かれていない情報を付け加えて話をふくらますこともある。また、中学レベルに多い言語材料中心（structure-centered）であれば、限られた語彙や表現の中で、いかに意味のある場面を設定し、生徒にとって実感のある表現を使わせるか、など工夫しなければならない。

## 3.4 Oral Introductionの実例

以下に、Oral Introductionの実例を挙げる。架空の教材であるが、新しいレッスンの冒頭の部分と考えてほしい。教師と生徒がどのようにやりとりして、内容を生徒に理解させていくかについて、1例を示す。生徒は予習を一切していない。新出文法事項はなく、新出語句が下に示した通りいくつかある。なお、板書計画については、ここでは、Oral Introductionのスクリプト中に説明として加えておく。

### (1) 教科書本文

There are eight planets in the solar system. The planet nearest to the sun is Mercury. The highest temperature on Mercury is about 430℃.

new words/phrases: planet, the solar system, Mercury, temperature, Celsius

### (2) Oral Introductionの概略

※アンダーラインの語・句・文については、その都度「全体→個人→全体」の要領で練習をして、言えるようにする。

Look at this picture. (地球の写真を見せて黒板に貼る) What is this? Yes, it's Earth. Now, Earth is going around a big bright star. (黒板の左端に太陽の絵を描く) What is it? Yes, it's the sun. And there are some other heavenly bodies or *tentai* going around the sun. (地球を含め8つの惑星の略画を横に並べて順に描く) Each of them is called a planet. (planet 板書) The



sun and the planets going around it—the whole system is called the solar system. (the solar system 板書) Earth is one of the planets in the solar system. How many planets are there in the solar system? Yes, there are eight. As some of you may know, there used to be nine. (冥王星を描き加える) What is this called? Yes, it's Pluto. But Pluto, which was the smallest and farthest planet in the solar system, is no longer called a planet. Today scientists think Pluto is too small to be called a planet. So there are eight planets in the solar system.

Now I'll show you another picture. (水星の写真を見せる) What is this? The moon? It looks like the moon, but, it is not. It is one of the planets in the solar system. It is here. (水星の略画の上に写真を貼る) What do you call this planet? Do you know its Japanese name? Yes, it is called *suisei* in Japanese. In English it is called Mercury. (Mercury 板書) Mercury is the planet nearest to the sun. The planet nearest to the sun is Mercury.

Do you think it is hot or cold on Mercury? Yes, it is very hot on this side because of the direct sunlight. But on the other side, it is very cold. Can you guess how high the temperature on Mercury is? Well, what is temperature? (temperature 板書) The temperature in this room is about 22°C (degrees Celsius). (実際に温度計を見せる) In Tokyo the temperature is high in summer, often higher than 30°C. In winter the temperature goes down, sometimes below zero. Now you know what temperature is.

Now how high is the temperature on Mercury? What is the highest temperature on Mercury? Can you guess? No, much higher [not so high]. Yes, it is about 430°C. The highest temperature on Mercury is about 430°C.

### (3) 補足

3.3.2で述べたように、できる限り、生徒に質問を投げかけるようにする。地球や水星、太陽系の惑星の数など、生徒の既知の知識に訴える。もちろん答えられない場合もある。水星の最高気温についてはクイズ的なやりとりが可能である。また、冥王星の話は本文にはないが、プラスアルファの情報として取り込んだ。教科書教材をできるだけ生徒に身近なもの、関心の持てるもの、実感の伴ったものにする工夫でもある。こういったやりとりを通して、教室の中でも、現実世界でのコミュニケーションに近いやりとりが実現できる可能性がある。新出語句の説明については、planet, the solar systemは、定義を示し、temperatureは文脈を利用したものと言える。本文自体がわずか2行なので、Oral Introductionですべてをカバーしたが、前述の通り、扱う本文がもっと長ければ（高校レベルではそういう場合が圧倒的に多い）、内容を取捨選択して要約することもできる。反対に、例えば、水星の気温を扱うところで、What is the highest temperature recorded on the earth? などのような質問を交えて、さらに話をふくらますこともできる。

## 4. Oral Introduction を核とした授業の1時間の流れ

### 4.1 1時間の全体像

まず、Oral Introductionを核とした授業の1時間の流れの1例を示す。語学教育研究所（2008：2）に修正を加えたものである。

- I. Warm-up
- II. Review
- III. Oral Introduction（生徒との英語でのやりとりによる新教材の導入）  
（Model Reading）（教科書を開く。ここで教師が音読のモデルを示してもよい）
- IV. Explanation（補足説明・日本語可。教材の100%理解を図る）
- V. Reading Aloud（音声と文字を結びつける・理解した内容の音声化。Outputの第一歩）  
（Model Reading）（この段階で、教師が音読のモデルを示す、という考え方もある）
  - Chorus Reading
  - Buzz Reading
  - Individual Reading（→Read & Look Up→ Recitation）
- VI. Story Retelling
  - Chorus
  - Pair Work
  - Individual（Presentation by Students）
- VII. Writing

### 4.2 Oral Introduction 以降の流れ

#### (1) Explanation

この段階で教科書を開く。Oral Introductionの補完的な作業で、教材の必要十分な理解を図る。内容の説明、文法の説明等、日本語を用いてよい。

#### (2) Reading Aloud

音読には、音声と文字を結びつける、理解した内容を適切に音声化する、といった目的がある。大事なことは、内容を理解したうえで音読をする、ということである。音読は以下の4段階を基本とする。「通り一遍の作業」にならないように、適宜発音指導をする必要がある。なお、Model Readingは、原則教師の肉声を用いる。

- ① Model Reading: 教師の肉声によって、生徒の到達目標を示す
- ② Chorus Reading: 教師のモデルに続いて生徒が読む
- ③ Buzz Reading: 生徒が各自のペースで音読する
- ④ Individual Reading: 教師の指名により個人が音読し、教師はそれをチェックする

### (3) Story Retelling

生徒による発表活動であり、言わば、生徒による Oral Introduction である。生徒は、Oral Introduction で教師が完成した板書（あるいはそれをワークシート化したもの）をもとに、自分なりの要素も加えて、発表活動を行う。この活動の注意点は以下の通りである。

- ① 生徒は、はっきり大きな声で正しい英語を用いて発表する。
- ② 聴衆を見ながら話す
- ③ 教師は、以下のような段階を踏んで指導する
  - ・ Chorus：教師のモデルに従って、全体による練習
  - ・ Pair Work：ワークシートを用いたペアによる練習。交替でひとりが発表者、ひとりが聞き手となる。
  - ・ Individual：全体の前で個人による発表。教師は、良かった点、改善点等、発表後に必ずコメントをする。この発表が、口頭による活動のひとつの目標である。

### (4) Reading Aloud からの発展

音読の発展活動として、Read & Look Up や、さらに暗唱 (Recitation) へ進むことも可能である。

### (5) Writing

音声中心で学んだ内容を書くことで締めくくる活動である。口頭で発表したものを書く、教科書本文を再生して書く（部分的な穴埋めでもよい）。長めの教材の場合は、要約文を書く、などさまざまなバリエーションが考えられる。「書く」活動は生徒の負担が大きいの、最後のまとめとして位置づける。

## 5. まとめ — 英語授業の心得五カ条

Oral Introduction を核とした授業を進める上で、基本となる考え方を「心得五カ条」としてまとめておきたい。オーラル・メソッドの考え方、語学教育研究所のこれまでの研究・実践から帰結されるものである。

### (1) 音声から文字へ

まずは音声から入るのを基本とする。Oral Introduction を核とした授業でも、最初は文字教材である教科書は開かせない。導入でも、まず音声を示してから、必要なら綴り字を板書する、という手順をきちんと守る。

### (2) 理解から発表へ (Input から Output へ)

単語の発音練習でも、立派なアウトプットである。アウトプットの前にはインプット（理解）が必要である。Oral Introduction で、新出語を導入する場合、まずきちんと意味を理解させてから、発音練習をする。句でも文でも同様である。意味が分かって初めてアウトプットが可能となる。現場の授業でしばしば見られる、教科書本文の発音練習をしてから意味（あるいは訳）

という手順は、この原則に反する。

### (3) 概要から詳細へ

Oral Introductionの段階では、すべてをカバーできないことも多い。まずは概要を理解し、その後、教科書を開き、Explanationを通して、細かい部分についても十分理解する。

### (4) 教師の指導から生徒の活動へ

Oral Introductionは、教師主導の活動である。もちろんこれで終わっては不十分である。生徒が主体となる発表活動につなげるのがひとつの流れである。裏返しに言うと、教師主導でしっかり下地作りをしておかないと、生徒主体の活動はうまく機能しない、ということでもある。教師による十分な指導もなく、すぐに生徒同士のいい加減なペアワークやグループワークが行われ、そのフォローアップもない、という授業もよく見かける。それで生徒に何が身に付くのだろうか。教師主導は決して悪ではない。

### (5) 全体から個人へ、そしてまた全体へ

練習の運営について述べたものである。1クラスに多くの生徒のいる環境で、全体にも個人にも目を配るための原則である。

## 6. 今後の課題

教師からも生徒からもあまり英語が聞こえてこない英語の授業というのは、やはり問題である。学習指導要領が改訂されても、現場—冰山にたとえれば水面下にある大部分—は、なかなか変わらない、というのが個人的な実感である。大学の教科教育の授業や、現職教員対象の研修会で、草の根的に、英語授業の考え方を伝えていくことが、今後必要である。その「伝え方」については、稿を改めて論じたい。

### 参考文献

- 小川芳男・他編著（1982）『英語教授法辞典 新版』三省堂
- 語学教育研究所編（1988）『英語指導技術再検討』大修館書店
- 語学教育研究所（2004）『語研ジャーナル 第3号』（特集：オーラル・イントロダクションのすべて）語学教育研究所
- 語学教育研究所（2008）『語研ブックレット2 指導手順再検討』語学教育研究所
- 語学教育研究所（2011）『語研ブックレット4 オーラルワーク再入門』語学教育研究所
- 小菅敦子・小菅和也（1995）『英語スピーキングの指導』研究社
- 白畑智彦・他（2013）『改訂版 英語教育用語辞典』大修館書店
- 文部科学省（2015）『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆館出版販売